

## 地金論争期におけるジェフリ、ホーナーとマルサス

荒井智行（中央大学経済研究所）

### 第1節 はじめに

本報告では、『エディンバラ・レビュー』（以下、『レビュー』と略記）の編者であったフランシス・ジェフリおよびフランシス・ホーナーと、『人口論』の著者で知られるマルサスとの間で交わされた多くの「書簡」の考察を通じて、地金論争期の知られざる経済思想の営みを明らかにすることを目的とする。より具体的には、彼らの間でおそらくもっとも「書簡」のやり取りが行われたであろう、19世紀前半の地金論争の時代に焦点を当てながら、マルサスの地金論がエディンバラ・レビュー（ジェフリ、ホーナー、ブルーム、シドニ・スミスのこと。以下、レビューと略記。）に与えた影響、とりわけホーナー金融論に与えた影響関係を明らかにすることである。

その「書簡」の中には、これまで内外で発見されてこなかった、スコットランド国立図書館所蔵の「ホーナーからマルサスへの手紙」（1809年、6月6日）や同図書館所蔵の「マルサスからジェフリへの手紙」（1811年4月7日）等の未公開「書簡」を利用している。これらの「書簡」は、スコットランド国立図書館で文献名や著者名がリスト化されていないものであり、同図書館を含む内外のいかなる検索システムを用いてもおそらく検索ヒットしない貴重なものである。それらの未公開「書簡」は、同図書館で徹底的に資料調査を行う中で発見したものであるが、これらの「書簡」の収集は、次の点で重要であると考えられる。それは、これらの重要「書簡」を発見することにより、これまでマルサスとレビューとの間で交わされたいくつもの「書簡」のやり取りの欠落部分を穴埋めすることにより、彼らの知的交流の一貫した流れを理解することができるようになったことである。より具体的には、地金論争のいわば裏舞台で繰り広げられた論文投稿をめぐる彼らの経緯や地金論争をめぐる彼らの議論のやり取りを示すことにより、これまであまり注目されることが少なかったマルサスがレビューに与えた影響関係を示すことができるようになったことである。

その意味で、本報告の主役はマルサスであるが、レビューの中でも地金論争に深く関係したホーナーの金融思想にも目を配りたい。地金論争期において、ホーナーは必ずしもメジャーな存在ではないが、本報告では可能な限り、この時期のホーナーの役割を再評価することに努める。これらの検討は、19世紀前半の地金論争において、ジェフリとホーナーの存在の大きさを再確認することにより、リカード等に偏りがちなこの時代の研究の

幅を少しでも拡張する意義を持つと考えている。

## 第2節 ジェフリ、ホーナーとマルサス

1799年に、フランシス・ホーナーは、エディンバラの物理学協会に向けて「人口について」と題する論文を執筆していた。1803年には、マルサスの『人口論』第2版の書評を計画していた。そして数年間、この書評の提案は、周りからからかわれ注意されることもあった。だが、そうした中でさえ、ホーナーは、1804年10月に論文、「穀物輸出奨励金に関する考察」の脚注において、マルサス『人口論』の書評を書いた。このことは、かなり早期から、ホーナーがマルサス『人口論』に対して個人的に強い関心を寄せていたことがわかる。

その頃から、ホーナーは、マルサス『人口論』に注目していたが、その一方でマルサスの経済学の能力についても高く評価していた。それは、1804年1月にホーナーがジェフリに送った手紙の内容からも窺い知ることができる。また、1807年7月に、ホーナーがエディンバラ時代からの友人であるウェブ・セイモア卿に送った手紙を見てみると、ホーナーが人物的な面からもマルサスを高く評価していたことがわかる。ホーナーが1808年以前にヘイルベリーでマルサスを訪問して以来、1815年まで、ロンドンで2人が多く出会った資料がいくつか残されている。その往復書簡を細かく調べてみると、地金に関する双方の意見交換によって、友好関係を次第に築くようになったことを確かめることができる。

マルサスの『レビュー』への最初の論文である「スペインの商業論」は、1808年の2月に同誌に掲載された。これもまた、ホーナーの目に留まり、マルサスの能力を高く評価することになった。そしてその時期に、ホーナーは、ジェフリに手紙を送り、マルサスが再び『レビュー』に投稿してもらうための執筆依頼のあり方を伝えた。それは、ジェフリがマルサスに『レビュー』への執筆依頼を行った後で、マルサスから返事が長く来ないようであれば、ジェフリからの執筆依頼をやめることが望ましい、という主旨のものであった。ホーナーは、ジェフリとマルサスとの友好関係があまりないようであれば、(ジェフリから)マルサスに論文投稿依頼を無理に行えば、マルサスの機嫌を損なわせ、今後、マルサスが『レビュー』に論文投稿をしなくなることを恐れたからであった。マルサスの経済学の能力の高さを早くから称賛していたホーナーにとって、マルサスは、自分たちの編集する雑誌の『レビュー』の価値を上げる重要人物であった。またそれだけではない。ホーナーは、その手紙の中で、地金論争に関わる経済学の論文が掲載された『レビュー』の売り上げが好調だったことを記しているように、マルサスが自分たちの雑誌に質の高い論文を投稿し

てもらうことは、雑誌の売上げの増加にとっても大きいため、マルサスとの関係を容易に壊したくないと考えられたからであると思われる。

こうしたホーナーのマルサスへの慎重な態度は、マルサスとの関係をより良好にさせた要因の1つとして見て取ることができる。また、東洋学を専門とする A.ハミルトンがマルサスとジェフリおよびホーナーとの間を仲介することにより、彼らは親交をよりいっそう深めることになった。1810年9月15日付けの「ホーナーからマルサスへの手紙」に記されているように、ヘイルベリーでマルサスが自宅にホーナーを招待し、ホーナーをより厚くもてなすようにもなったからである。

ただし、ホーナーとマルサスとの友好関係は、単に友人としての交流面のみではなかった。これらの互いの交流を通じて、学術面においてもいっそうの知的交流を深めることになった。とりわけ、1810年という年は、地金論争の真っ只中にあり、ホーナーもマルサスとともに、この論争に高い関心を持っていた。当初、ホーナーは、地金論争の議論の難解さをマルサス宛ての手紙の中で吐露していた。1810年9月15日の同手紙では、「地金報告書」を高く評価する一方で、イングランド銀行による紙幣の増発が銀行の責任の欠如にあると言及したほか、イングランドの物価の高騰による諸外国への影響や「信用」の抑制をいかにすべきかについて、マルサスに意見を求めていることがわかる。ホーナーは、こうしたマルサスとの手紙のやり取りを通じて、地金論争についてのマルサスの見解を学び取りながら、地金論争の議論の知識を次第に深めていった。

特に、地金論争が頂点に達する1810年以降になると、ホーナーとマルサスとの書簡のやりとりはいっそう活発になった。ホーナーは、1811年1月4日の手紙の中で、イングランドにおける軍事費の支払いが国内の物価を高騰させたかどうかについてマルサスに質問し、それを分かりやすい言葉で答えてほしいと述べている (Horner 1811.1.4)<sup>1</sup>。

ただし、このことはホーナーの地金論争への強い関心を示すものだけではなかった。この当時、ホーナーは『レビュー』の編集者でもあり、同雑誌の売り上げを伸ばすうえでも、地金論争の議論を活発化させることは重要であった。1810年以前のホーナーのマルサス宛て書簡の中でも見られるように、ホーナーは、各論者の地金の議論を取り上げながら、物価の高騰の理由についてマルサスに尋ねているが、その聞き出し方は、地金論争を盛り上

---

<sup>1</sup> ここで、ホーナーが分かりやすく説明してほしいと記したのは、地金の議論に関する彼の能力が十分ではなかったからだけではなかった。これらの複数のマルサス宛ての「書簡」にも記されているように、地金論争に関する難解な議論について、『レビュー』の一般読者にも分かるように、噛み砕いて説明してほしいからである。ただし、その当時、学術的にも有力な雑誌とみなされていた『レビュー』の水準を維持するために、単純すぎるほどに議論のレベルを落とす必要はないとも記されている。ここに、雑誌の編集者としてのホーナーの複雑な気持ちを読み取ることができる。

げるための意図的なものでもあった。その例として、次の点をあげることができる。1810年の冬に、ホーナーは、リカードウに『レビュー』の招待論文を依頼したが、それに断わられた (Horner 1810.12.3)。その理由は、その当時、リカードウが「ボサンケ氏に対する回答」論文の執筆に集中していたからであると言われている。だが、ホーナーは、その当時、地金主義に徹していたリカードウと、商業の議論を交えながら地金論を展開したマルサスとの学問的な論争を促進することを強く望んでいた。そこで、その論争を煽るべく、同「ボサンケ氏に対する回答」論文をマルサスに別途郵送し (Horner 1811.1.4)、この論文への批評も含めて、『レビュー』に地金に関する論文の執筆をマルサスにお願いしたのである。マルサスはすぐにこれに承諾し、「紙幣の減価」というタイトル名でそれに応じた論文を『レビュー』に投稿した。そして同論文は、1811年2月に同雑誌に掲載された。この論文で、マルサスは、リカードウとボサンケの双方を批判し、自らが正当な地金主義者であることを示した。これに対して、リカードウは、1811年4月に「地金の騰貴」論文を発表し、マルサスの同論文を批判した。

そうしたマルサスとリカードウとの論争は、まさに地金論争を白熱化させる1つの契機となったが、このような白熱した論争は、上述したように、ホーナーが意図的に仕組んだものであった。これらの点から、1810年の冬から1811年にかけて地金論争が激しくなる中で、ホーナーはその論争のいわば火付け役であったといえる。地金論争の表舞台では、マルサス、リカードウ、ソントン、ハスキソン、キング卿などがさまざまな雑誌やパンフレット等の媒体物に論文を投稿することによって多くの論争が生じたが、その論争の仕掛け人としてホーナーをあげることができる。

### 第3節 ホーナー地金論へのマルサスの影響

前節では、地金論争期におけるホーナーの存在の大きさを示したが、ホーナーは、地金論争の立て役者だけでなかった。周知のように、ホーナーは、地金論争の只中で、議会で主導的な役割を果たしたことで知られる。この点で特に思い起こされるのは、1811年5月6日に行われたイングランドの下院でのホーナーの演説である。この議会演説は、全16箇条から成る決議案を基にして、イングランド銀行の紙幣の過剰発行に対する批判と兌換制の復帰の有効性について3時間にわたって述べられたものである。そうしたホーナーの演説は、その当時の地金論争に関わる各論者に多大な影響を与えた。それは例えば、リカードウやパーネルなど、銀行の制度的なあり方を批判した人たちからも大きな反応があった。ホーナーは、この議会演説において、地金の高価格の主な原因を、銀行紙幣の過剰発行に

求める一方で、兌換制の再開を求める主張を行った。また、穀物価格の高騰の原因についても言及し、国内の穀類の価格が銀行紙幣の増加に追随して生じたものであるとし、これはインフレの中で避けられないものになったと論じた。

ここで特筆に価するのは、そうしたホーナーの議会演説が、マルサスからの影響を強く受けていたことである。とりわけ重要なのは、その議会演説の前に、両者がともに連絡を密に取り合っていたことである。その議会演説からおおよそ1ヶ月前の1811年4月2日において、ジェフリはマルサスに手紙を送り、その中で、マルサスに、地金と紙幣に関する論考を『レビュー』に投稿してほしいと述べた。そして、その5日後の1811年4月7日に、マルサスはこの論文執筆依頼に承諾する手紙をジェフリに送った (Malthus 1811.4.7)。その時、ホーナーは、この返事の手紙を知る前に (マルサスからの返事の手紙がジェフリにまだ届いていないと思われるため)、その1日後の4月8日にマルサスに次のような手紙を送った。それは、穀物輸入奨励金との関わりで減価と穀物輸入との関係について、マルサスに意見を求めるものであった。このことは、ホーナーが、『レビュー』の中でのマルサス論文への高い信頼とは別に、個人的にも、地金に関する精緻なマルサスの考察をいかに信用していたのかを示すものであるといえる。地金論争の時期において、地金の高価格の原因を穀物貿易とセットで検討しようとするホーナーからしてみれば、同じ関心を持ち、かつ比較的早い時期からそれらとともに論じ、その分野で既に知名度が著しく高かったマルサスにどうしても尋ねたかったことであるといえる。むしろ、これらの手紙の送付の日付を考慮に入れるならば、4月29日までに兌換制の制限令廃止の議案の提出を委員会にかけ、4月初旬に明示していたホーナーにとって<sup>2</sup>、その参考となる意見をマルサスから純粋に聞きたかったといえるだろう。

ここで注目に値するのは、ホーナーがマルサスに手紙を送った4月8日の後で、彼らが一緒に過ごしていたことである。その頃、ホーナーは、東インド・カレッジにおいてマルサスと一緒に2、3日間過ごすために、知人のウィショーと一緒にロンドンを発った。不運にも、彼らの議論についての記録は残っていない。だが、上述したホーナーによる重要な議会演説を前にして、ホーナーとマルサスが一緒に話し合ったという事実は推測可能である。彼らが一緒に過ごした後で、ホーナーが16箇条の決議案を提出し、5月6日の議会演説を行ったことを考えれば、ホーナーの主張の背後において、マルサスの存在を意識せざるをえない。本報告では、最後に、これら一連のホーナーの主張が、マルサスのアイデアといかに結びつくかについて検討する。もし、ホーナーの主張の中にマルサスの考えが

---

<sup>2</sup> なお、その議会の開会前の4月22日に、ホーナーは、全16箇条から成る決議案を議会に提出した。

垣間見られるならば、ホーナーの地金論には、マルサスという、強力なブレインがいたことを忘れてはならないだろう。

#### 参考文献

- Bullion Report. 1810. *Report, together with Minutes of Evidence, and Accounts, from the Select Committee on the High Price of Gold Bullion*, London. 田中生夫編訳『インフレーションの古典理論——「地金報告」の翻訳と解説——』未来社, 1961年.
- Cockburn, H. 1852. *Life Of Lord Jeffrey: With a Selection from His Correspondence*, Lippincott, Grambo, Philadelphia; Charleston, Biblio Life.
- Fetter, F. W. 1957. *The Economic Writings of Francis Horner in the Edinburgh Review, 1802-6*, London, London School of Economics and Political Science.
- Flynn, P. 1978. *Francis Jeffrey*, London, Associated University Press.
- Horner, F. 1809. *The Letter from Horner to Malthus*, Edinburgh, National Library of Scotland, June, 6.
- [1853] 2008. *Memoirs and Correspondence of Francis Horner*, ed. by L. Horner, 2vols, John Murray, London; rep., London, Kessinger Publishing.
- Jeffrey, F. 1814. *The Letter from Jeffrey to Malthus*, Edinburgh, National Library of Scotland, May, 11.
- [1894] 2012. *Selections from the Essays of Francis Jeffrey*, ed. by L. E. Gates, London, Ginn & Company; rep., London, Forgotten Books.
- Malthus, T. R. 1811. *The Letter from Malthus to Jeffrey*, Edinburgh, National Library of Scotland, April, 11.
- Pullen, J. and Parry, T. H. eds. 1997-2004. *Malthus: The Unpublished Papers in the Collection of Kanto Gakuen University*, 2vols, Cambridge, Cambridge University Press.
- 柳田芳伸. 2011. 「フランシス・ジェフリーのマルサス『人口論』評」, 『長崎県立大学経済学部論集』45(3).
- 渡辺佐平. 1984. 『地金論争・通貨論争の研究』, 法政大学出版局.
- ※それ以外の参考文献については, 当日配布致します.